1ST
CELEBRATE HANUKKAH

「ブライダル・パラダイム」(5)

2022.12.24 (夜)

「ハヌッカーの祭り」の大切な視点

1. 「スッコート」と「ハヌッカー」は、二つで一つであること
2. キリストの花嫁は、ストイケイアから完全に脱却すること
3. 花嫁の献身は、神への「芳しい香り」であること
4. 神のご計画を意識しながら歩む、きわめて夢のある未来的志向をもった祭りであること

1.「主の食卓の制定」に見るBridal Paradigm ①

●昨日の夜は、　神の妻であるイスラエルの民の回復がメシア王国においてなされることを学びました。「ブライダル・パラダイム」(Bridal Paradigm)が、聖書全体の初めから終わりまでを貫いています。イスラエルの民が合意のもとに神と結婚したのは、出エジプトした後のシナイ山においてでした。では、教会がイェシュアと婚約した日はいつでしょうか。つまりイェシュアの花嫁となった時はいつだったのでしょうか。そのことを今回正しく理解したいと思います。

●その答えは、主の食卓が制定された「過越の祭り」の時です。イェシュアと弟子たちの「最後の晩餐」で語られたイェシュアのことばと、その食事の席で最後に差し出された「杯」(ぶどう酒)を弟子たちが飲んだことが、実はイェシュアと弟子たちとが婚約した時であったのです。

1.「主の食卓の制定」に見るBridal Paradigm ②

【新改訳2017】マタイの福音書26章26～29節

26 また、一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、神をほめたたえて
これを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取って食べなさい。これはわたし
のからだです。」

27 また、杯を取り、感謝の祈りをささげた後、こう言って彼らにお与えになった。
「みな、この杯から飲みなさい。

28 これは多くの人のために、罪の赦しのために流される、わたしの契約の血です。

29 わたしはあなたがたに言います。今から後、わたしの父の御国であなたがたと
新しく飲むその日まで、わたしがぶどうの実からできた物を飲むことは決して
ありません。」

●イエシュアと弟子たちの過越の食事の折、イスカリオテのユダがイエシュアを裏切る
ためにその席を立って出て行った後に、「主の食卓の制定」がなされたのです。

1.「主の食卓の制定」に見るBridal Paradigm ③

●「最後の晩餐」とも言われるこの時のイェシュアのことばは、今日のキリスト教会が「聖礼典」として大切にしている「聖餐式」の根拠となっています。イェシュアの言われる「新しい契約」に、弟子たちが同意して婚約したのです。婚約をしたのであれば、教会が「キリストの花嫁」と呼ばれるのは至極当然です。ところが、教会においてこの意識が希薄なのです。なぜでしょうか。その大きな理由は、私たちがユダヤの婚礼のしきたりを知らずにいることにあります。キリスト教の歴史のある時点から、聖書のルーツであるユダヤ視点を断ち切ってしまい、ボタンのかけ違いが起こりました。

●ユダヤの婚礼のしきたりという視点から、この「最後の晩餐」を考えるならば、おそらく聖餐(ミサ)に与る者のイメージは一新されるはずです。つまり、イェシュアがなぜ「この過越の食事をすることをどんなに待ち望んでいたことか」と言われたのか、そのことが良く理解できるのです。

2. ユダヤの婚礼のしきたりにおける三段階 ①

●ユダヤの婚礼のしきたりには三つの段階があります。一つ目は「許嫁(いいなずけ)の段階」、二つ目は「婚約の段階」、そして三つ目は「結婚」(婚姻)とそれに続く「宴会」(婚宴)の段階です。

(1) 許嫁の段階

●ユダヤの場合、結婚を当人以外の者が決定するということが普通で、聖書の中にもそのことが記されています。たとえば、アブラハムの息子であるイサクの場合、彼の妻をアブラハムの親戚の中から選ぶようにと、アブラハムの家の最年長のしもべであったエリエゼルがアブラハムの生まれ故郷へと遣わされます。そして見つけたのがアブラハムの兄弟ナホルの妻ミルカの子ベトエルの娘のリベカでした。イサクとリベカは許嫁ではありませんでしたが、父親が息子の嫁を見つけるという風習が古くからあったということを示しています。神である主が彼らを許嫁として選んでいたと考えられます。一人の御使いによって地的な出会いがなされたことがその根拠です。

2. ユダヤの婚礼のしきたりにおける三段階 ②

●御父が御子をこの世に遣わしたのも、神ご自身の息子に妻を与えるためだと言えます。そのための段取りに必要な費用も、実は父親が責任をもっているのです。アブラハムはイサクの嫁を探すのに必要な費用(贈り物も含めて)を、最年長のしもべエリエゼルに託しています(創24:22,30, 53)。結婚の約束が取り付けられるかどうか、まずは女性の意思を確認するための宴会を開きます。そのための費用をすべて、男性の父親が出すしきたりだったのです。以下がその例です。

【新改訳2017】士師記14章1～2, 10節

1 サムソンは、ティムナに下って行ったとき、ペリシテ人の娘で、ティムナにいる
一人の女を見た。2 彼は上って行って、父と母に告げた。「私はティムナで一人
の女を見ました。ペリシテ人の娘です。今、彼女を私の妻に迎えてください。」

10 彼の父がその女のところに下って来たとき、サムソンはそこで祝宴を催した。
若い男たちはそのようにするのが常だった。

2. ユダヤの婚礼のしきたりにおける三段階 ③

●「祝宴」は「ミシュッテ」(מִשְׁתֶּה)で「祝宴、宴会、晩餐、豪華な食事会、ふるまい」とも訳されます。このための出費のすべては男性の父親が出すのがしきたりでした。

(2) 婚約の段階

●その祝宴は一週間を費やし、その最後に男性が差し出す「ぶどう酒」を女性が受けて飲んだならば、婚約成立ということになるのです。このことをよく示しているのが、ヨハネの福音書2章に記されている「カナの婚礼」の話です。「婚礼」とあるので、結婚してその婚宴が開かれているのだと私たちは考えてしまいます。それが固定観念、つまり理解の型紙です。「カナの婚礼」は婚約に至るかどうか、そのための宴会がなされているのです。宴会の最後に、男性が女性に結婚を申し込む際の最後のぶどう酒がなくなった話がなされているのです。

2. ユダヤの婚礼のしきたりにおける三段階 ④

●最後に男性が良いぶどう酒を、花嫁となってほしい相手に差し出して、それをその女性が受け取ったときに、はじめて両者互いに花婿と花嫁としての縁を結ぶことになるのです。つまり**婚約成立**ということになるのです。

●カナの婚礼では最後に良いぶどう酒が出てきます。果たして、女性がその良いぶどう酒を飲んだかどうかについて、この箇所では記されていません。その「良いぶどう酒」は、ただ「良い」としか記されていません。宴会の最後に出されるぶどう酒は、やがて花婿なるイェシュアが花嫁である教会のためにご自身の肉を裂いて流される血であることの「しるし」となっているのですが、まだ隠されているのです。

2. ユダヤの婚礼のしきたりにおける三段階 ⑤

●ユダヤの婚礼では、一旦婚約が確定すると男性は実家に戻り、結婚に備え始めます。伝統的には、一年後に式が持たれることになっていました。畑を備え、耕し、作物が植えられ、父の家に妻を受け入れる準備として部屋が造られます。彼が花嫁を迎えるために、万全の配慮と取り組みがなされ、すべてのことに細心の注意が払われますが、父親がゴー・サインを出さない限り、花婿は花嫁を迎えに行くことは許されないのです。ですから、結婚の日がいつかということは、花婿にも分からないというわけです。

●これらのことが背景としてあるのですが、ユダヤ的背景を知らなければ、イエシュアの言われたことばを理解することはできないのです。

2. ユダヤの婚礼のしきたりにおける三段階 ⑥

●ユダヤのしきたりにおける一週間に渡る宴会で、花嫁の候補とされた女性は男性のすることをじっくりと観察するのです。それはいわば、花嫁候補としての弟子たちがイェシュアの公生涯をじっと観て来たことに重なります。そしてその宴会の最終日に、男性の差し出すぶどう酒を女性が受け取って飲むならば婚約成立です。

●おそらく、女性の前にぶどう酒を置いた男性は、相手がぶどう酒を飲むかどうか内心ハラハラ・ドキドキだったと思います。もし差し出したぶどう酒が飲まれなければ、それまでの宴会とその費用はすべて無意味ということになってしまいます。最も期待が高まるとき、それがイェシュアの「わたしは、苦しみを受ける前に、あなたがたといっしょに、この過越の食事をすることをどんなに望んでいたことか」(ルカ22:15)ということばなのです。

2. ユダヤの婚礼のしきたりにおける三段階 ⑦

●イェシュアとその弟子たちとの「最後の晩餐」が「婚約」であったとするならば、イェシュアが「これを取って、互いに分けて飲みなさい。あなたがたに言いますが、今から、神の国が来る時までは、わたしはもはや、ぶどうの実で造った物を飲むことはありません」(ルカ22:17～18)と言った意味が容易に理解できるのです。つまり「神の国が来る時」とは「結婚の時」のことであり、花婿なるイェシュアが空中再臨によって花嫁なる教会を迎えに来る時(＝携挙の時)なのです。

●幸い、弟子たちはそのイェシュアが差し出すぶどう酒を飲んで新しい契約を結びました。婚約はしましたが、正式な結婚はまだです。

●ここで質問です。婚約が成立したとき、
イェシュアはぶどう酒を飲んだでしょうか。飲まなかったでしょうか。

2. ユダヤの婚礼のしきたりにおける三段階 ⑧

答え

●ユダヤの婚礼のしきたりでは婚約時に二人は杯を交わしますが、花婿となる者はその杯を飲みません。飲むのは花嫁だけです。なぜなら花婿となる人は結婚するまでの間(おそらく1年間)は、花嫁のために身をきよめるために、また酒の席で放蕩に走って誘惑を受けないようにするために、杯を口にしないようです。口にできるのは婚姻の後です。

2. ユダヤの婚礼のしきたりにおける三段階 ⑨

●最後の晩餐の時に、イエシュアが「あなたがたはわたしを捜すことになるでしょう」(ヨハネ13:33)と言ったとき、ペテロとの問答が始まります。そしてイエシュアは「あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです」と言われました(14:2～3)。イエシュアが天に戻られるのは新居を備えるためですが、ペテロはこのことを理解できなかったようです。

●イエシュアが花嫁を迎える前に、十字架の死によって花嫁の罪の贖い、罪のきよめをなし、花嫁を花嫁としてふさわしく整えるようにされることも、その準備の一環なのです。私たちは今この期間に置かれています。

2. ユダヤの婚礼のしきたりにおける三段階 ⑩

(3) 結婚の段階

●最後の晩餐の時に、イェシュアは「過越が神の国において成就するまでは、わたしはもはや二度と過越の食事をすることはありません」と言われました。それはどういう意味でしょうか。

●七日間の花嫁とのハネムーンの期間(つまり教会の携挙後の七年間)が終わると同時に、地上では大患難を経て悔い改めた神の民イスラエルが「子羊の婚宴」に招かれます。その直前には彼らもまた本来の妻として回復されているのです。ここでの「過越」とは、イスラエルを大患難から救い出すために反キリストに対する神のさばきがなされることを意味しています。ですからその時まで、イスラエルの残りの者はメシアとの婚宴の食卓を囲むことは出来ないということを意味しているのです。

2. ユダヤの婚礼のしきたりにおける三段階 ⑪

●重要なことは、メシアの再臨なしに、キリストの花嫁(教会)と神の妻であるイスラエルの民とが、妻としての座に着くことはないということです。キリストの花嫁(教会)とイスラエルの民は、メシア王国においてはじめて結婚、再婚による「妻」という共同相続人としての同じ一つの立場に着くのです。それまでは、実際的にこの地上においてイスラエルと教会(メシアニック・ジューと異邦人)の一致はあり得ないのです。

●それゆえ、私たちは「御国が来ますように。みこころが天で行われるように、地でも行なわれますように」と祈らなければならないのです。

「御国が来ますように」＝「ターヴォー・マルフーテハー」

תָּבֹא מַלְכוּתֶךָ

3. 聖餐は「花婿を待ち望む時」

●今日の教会でなされているキリストのからだと血とに与る聖餐は、以下のように三つの意義があると理解されています(福音的教会の場合)。

① 私たちを救うために死なれたキリストを覚えること(過去)
② キリストを信じる教会の一員であることを確認すること(現在)
③ 神の国の完成時の喜びの祝いを展望すること(将来)

●聖餐の中で最も認識が弱い部分は③の「将来的展望」です。なぜなら、キリスト者である自分が「キリストの花嫁」として花婿なるイエシュアと婚約した者であるという認識が希薄だからです。「終わりの時」が近づいていることを覚えるならば、聖餐(ミサ)に与るたびに「キリストの花嫁」としての自覚がますます強められなければならないのです。

今回のまとめ

●キリストの花嫁の願いは、花婿が迎えに来られることです。
今日の教会にその意識が希薄である原因は以下の点です。

(1) ユダヤ的ルーツの喪失
(2) 聖餐に含まれる将来的展望の希薄化
(3) 聖書におけるBridal Paradigmが不明確であること

●(1)(2)(3)を回復するように努めなければなりません。